

2:11 ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

2:12 ケファは、ある人たちがヤコブのところから来る前は、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人たちが来ると、割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行ったからです。

2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり、バルナバまで、その偽りの行動に引き込まれてしまいました。

2:14 彼らが福音の真理に向かってまっすぐに歩んでいないのを見て、私は皆の面前でケファにこう言いました。「あなた自身、ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではなく異邦人のように生活しているのなら、どうして異邦人に、ユダヤ人のように生活することを強いるのですか。」

2:15 私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、「異邦人のような罪人」ではありません。

2:16 しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによっては義と認められないからです。

2:17 しかし、もし、私たちがキリストにあって義と認められようとするので、私たち自身も「罪人」であることになるのなら、キリストは罪に仕える者なのですか。決してそん

なことはありません。

2:18 もし自分が打ち壊したものを再び建てるなら、私は自分が違反者であると証明することになるのです。

2:19 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。

2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

パウロが意図したのはケファすなわちペテロへの批判ではありません。彼の評判を貶めるためにこれを書いているのではないことは明らかです。9節にあるように、パウロはペテロを尊重していたのです。だからこそ彼はペテロを非難したのでしょう。ペテロの行動が影響力を持っていたからであり、ペテロと共に一致かたかったからです。

ただし、その後にペテロがどのように弁明したかは書かれていません。彼は彼で信仰の弱い人への配慮をしていたのかも知れないのです。ここでパウロが強い口調で論じているのは、福音の十全性です。十字架は救いにとって必要にして十分であるということです。これはどんなに強調してもし過ぎることはありません。

たとえ人間関係が壊れたとしても（ペテロとの仲は悪くなりませんでした）、イエス様の十字架の救いが損なわれることは避けなければなりません。

パウロのように永遠の命を何よりも大切なもの

とし、イエス様の十字架を何よりも尊いものとして、行動を決めて行きましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

